

た。唯それだけだ。」

男は私に近寄ると、私が今さっき把^{つか}みそこねた銃を拾い上げた。

「こいつは何だ。妙な代物だな。凄いやつか。」

「競技用だ。」

「この、そこら中に付いている固りは何だ。こいつで、ぶん殴るのか。」

「それで殴つたら、次に撃つ時、手首が寂しくなる。水平安全装置と均衡装置だ。単なる御守りだよ。競技の時しか役に立たない。普通に持ち運んだら、狂

いっぱなしだ。」

「たいしたもんだ。すると、お前さん、射撃の選手つてわけだ。」

「選手じゃない。趣味にやっただけだ。」

「そいつはいい。逆らわずに俺達の仲間に入るか。」

「逆らひはしないよ。」

「よし決まった。」

「よし決まっちゃいない。」

命令されるのには慣れてる。今迄もずっとそうだった。大したことではない。

「ねえ、ちよつと。」

私が荷の護衛に回されると、よく、こんなぐあいに

声を掛けられた。

「なかなかいい男じゃない。こつち来なよ。」

私は、そう言われても、大抵、黙ってその女の方に顔を向けるだけに過ぎない。

「何、お高くとまってるのよ。」

女は、そう言いながら、私の方へ近寄って来る。私は、顎を引いて、女の顔を見下げなければならなかった。

「気取ってたつて腹ん中は見えてるんだからね。」

「何が見える。」

私が女にそう訊くと、女は笑った。

「ひつ。かっこつけて。まあ、いいよ。おいで。」

かつて使われた「寂しい」とか「鍵」とか「今日は」とか「今晚は」とか「今夜は」とか、そんな装飾は全く無かった。唯、彼女達は、余剰を保持する男の余剰を求めて、彼等を誘い、声を掛ける。彼女達は大方余剰を得ることが無かったからだ。男達はそれでも良かったが。彼女達は、それに在り付くには、少少弱く、見るからに働けなかつたが。彼女達は、種族保存の任を背負った様に、SEXを求め、子を産み、育て、その為に多くのものを必要とした。必要の量と質は彼女達を踏み止まらせることができなかった。危機感^{クライシス}はそれを煽り、不安が彼女達の在り方を制限してしまつてた。彼女達の心の震えを止め

るには、全て必要なことなのだ。あの髭面は、こういつたシステムが自然に出来上がるのを予想して、彼女達に手を尽さなかつたに違いない。

「あたしを馬鹿にしてるのね。他にももつと若くて可愛い女がいるって言いたいのね。ハハーッだ。あんな瓦礫の間でやるのに、そんなこと関係あるつて言うの。」

女は、私が誘いに乗らず、突つ立っているのを見て、怒つた様にそう叫んだ。

「哀れだね。」

「はぁん。あんた、何言い出すの。」

「別に。」

「こんな時に、哀れも何も無いもんだわ。」

女は呆れて去つて行こうとしたが、少々離れてふと立ち止まり、私を振り返つた。

「ねえ。いい話してあげようか。」

腹の虫でもおさまらないのだからか。からかわれるのも面白そうだ。私は聞く気になつた。

「昔、或る男が女の子に声を掛けました。女の子は、その男が嫌いでしたが、あまりしつこいので、一度だけ、つきあつて、そのことを何とか言おうとしました。でも、男は非常に強引で、女の子はそのことを言い出せません。男は、始^{はじめ}音楽を聴きに行こうと言つたのですが、そんなことは本当の目的ではあり

ませんでした。良からぬことを考えていました。女の子は、それに気付いて逃げようとしたが遅すぎました。

しばらくして、その女はそいつに声を掛けねばならなくなりました。それも寝る為にです。女は、昔のことを覚えていたのですが、頭にそれを刻み込んだままにしておく余裕が無くなつていました。だから、すぐには、そいつであることに気付きませんでした。それが、そいつに馬鹿にされた後でふと思ひ出しました。顔なんかそれ程見ていなかったのに、はつきりしませんでしたが、帰り際に振り返つてみると、やつぱり、その男でした。何が哀れよ。あたしは何もだましてものにしようつてんじゃないわ。大きな御世話よ。

女は吐き出しそうになつたものを体内に戻す様に、大きく息をすると、やさしそうに造つた顔で静かに言った。

「おいでよ。」

そして、彼女は行つてしまつた。私は行けなかつた。だが、そいつは私じゃない。

私は巨大な水槽の前に立っている。その中には、巨大な生物が身を踊らせて停止している。彼が、いくら激しく動いても、彼の位置は停止しているのだ。水流が、彼を駆り立てているようだ。ほら、動け、

ほら泳げ。そして彼は、時々水面に背を出して潮を吹く。それが、低い天井にぶち当たり狭い容器の中に飛散して、再び、水流に戻る。彼もまた放たれるのを待つものだろう。

鯨は、その巨大な身体を無駄無く利用できるという。肉は食料、脂肪は鯨油、ひげはばねに利用できるということを聞いたことがある。その歯は、かつて野蛮なアメリカ人が、それを得る為だけに鯨を獲り尽した程の細工物の材料になる。だが、あの目は一体どうなるのだろうか。あれにも用途があるのだろうか。その空な眼は、もう何世代の間、見るべきものを失ったままの眼だ。私が、もし彼の解体作業をする羽目になったら、あの目をこっそり持ち出して、外気に曝してやる。この都市の残骸を離れて、何も無く、柔かい荒地にそと置いてやる。海からは遠い。あまりに遠い。その澄んだ海水には投げ入れてやる事が出来ないが。否、空だつて、今の空だつて。あなたが十分気に入るぐらい碧い。恐しい程静かで、澄んだ海を、何世代か前の亡霊達と話しながら、深海が手厚く押し潰してくるまで、落ちてゆくことはできないが。あなた達が鯨になつてから、こんなに碧い空を見た者はいないかもしれない。ひょつとしたら、あの浄化作用の欠片でも残つていて、その空な濁つた目を治して呉れる。ちゃんと目

潜航艇なのだ。トレーラーが走り回り、強力な照明が上から私達を照らす。私の影は、その無力にして二次元の姿を私の足元に縮めて怯えた。

私達は、言われた通りに、倉庫の様な処で箱詰め荷を積み、出口まで運ばれた。私は、荷役が荷をトレーラーに積むのを、その荷台に腰掛けて見ていた。気に入らない。

鯨の養殖場を出ると、私達は古代の隊商に戻つた。重い荷物を肩に担いだ荷役の傍で、長い隊列の前や後になりながら、私は網膜の裏側まで焼き付いてしまった殺風景な廃墟を振り払おうと、無駄な努力を続け始めていた。何時もの様に、新しい文明の姿を気かけながら。

私が列から少し離れて最後尾を歩いていると、前から護衛の一人が小走りにやって来て早口に言った。「前の方に、変なのがあるぞ。一寸来て呉れ。」

隊列は何時の間にか止まり、私は、その男を最後尾に残して、前へ移ることにした。

前では、他の護衛達が一同に会して前方を眺めていた。

「何があるつて。」

集まっている連中が何かを見ていて私に気が付かないでいるので、私が、その一人にそう声を掛けた。

「やあ。あれ何だと思ふ。」

玉を天に向けて据えてやるよ。
「あのトレーラーに乗ってくれ。」

鯨の養殖場を占拠している者達の一人が私達にそう言った。古代の隊商の様に大勢の荷役を連れて、荷を肩にして運んで来た私達にとつて、それは、あまりにも馬鹿げたことだつた。そして、その馬鹿げた一言が私の瞑想を砕いたのだ。

「向こうに、干した鯨の肉を箱詰めにしてある。この前に、そちらが持つて来た箱に詰めてあるからすぐ分る。早く乗つてくれ。序に載せて、出口まで運んでやるから。」

トレーラーだと。

ここには専用の原子炉が建造されていたのだつた。養殖も鯨ともなると、それに費されるエネルギーも生半可なものでは済まない。自給した方が効率が良いのだ。

そして、この動力はまだ当分切れることは無いだろう。その為に、ここには前世の遺物が充滿し続けている。ここは以前と変り無く動いているのだ。時代錯誤。手落ち。出鱈目。原子力が模造品を創り出し、海の巨大な生物がそこに居る。まるで、あの原子力潜水艦の裏返しだ。原潜が、人知れず海の中に軍事基地を進行させる様に、裏返つてはいても、これは、前の時代が時間の中に放つた

その男は、そう言いながら前を指示した。私が指示された方を見ると、そこには、半透明のドームが内からの光で赤く色付いていた。

「来る時と同じ道だが、あんなものは無かつた。」

別の男が私に言った。確にあんなものは無かつた。辺りの崩れ方や盛り上がり方から見て、地下から迫り上がつて来たのに違いない。

「危険は無いだらうか。」

また別の男が私に訊いた。何で、私に訊くんのだ。知るわけがないだらうが。

「誰か行つて、調べて来なけりゃ。」

また別の男。はいはい、私が行つて来ます。

「行つて来る。」

私が言った。

「頼む。」

どういう理由か、声が揃つた。

近付いてみると、それはかなり大きなドームだつた。10 m程もある広い道（とは言つても、それは唯通れる場所という意味しかない）いっぽうの大きさがある。道の両側には、深いクレパスが続いているのだが、道の縁からドームの下を見ると、それは地下深くから伸びて来た円筒の上のついているのが分つた。一体、何だらう。私がクレパスの中を覗き込みながら考えていると、私の立つている場所が崩れ

始めた。私は素早く跳び退き、道の中側へ寄った。道の端が、クレバスに崩れ落ちる。まだ、崩れる箇所が残っているとは。この得体の知れないものは、新しい破壊をもたらそうとしているのか。後から戻って来いと叫んでいるのが聞える。人を、こんなものを調べにやっておいて、今さら、よくそんなことが言える。しかし、戻った方が良さそうだ。

「今戻る。」
私がそう言った瞬間、今度は道全体が崩れた。それは、他の者達が待っている処までにも渡っていた。逃げようとしても遅い。両側のクレバスが一つになり、新たな大きなクレバスが、その底に道と人々を呑み下してしまった。

「かわいそうに。」
私は、赤い光に満ちたドームの内側で、口に出してそう呟いた。私が、崩れ落ちる道を蹴ってドームに取り縋ると、それは私を中へ引き入れたのだ。どうなったのかは分らない。気が付くと、私はドームの内側で座り込んでいた。腰が痛い。不用意に飛びついたのが間違いだ。それが何の抵抗も無く、私を中に入れてしまったので、私は腰をしこたま打って床に着地したのだ。一体、このドームは、本当に存在するのだろうか。試しに手で触れようとすると難無く外へ突き抜ける。単なる立体映像かもしれない。

も通じていそうにない。その広間の中央に私は降りて来たのだ。

まず、私の目を捕えたのは、壁に傾め込まれている石板の様なもの。そして、次は・・・無かった。何処をどう眺めても他には何も見当らなかった。もし、ここが救助施設のようなものでないとしても、ここが、何の意味を持つものなのか、これでは見当つかない。私は知らない間に石板の前に立って、それに刻まれた文字を読んでいた。

OPTIMISMO

この前に立つ者は、人類の文明が崩壊してしまつて、これから人類はどうなるかということに大きな不安を抱いていることだろう。しかし、心配は無用である。崩壊のショックも暫くすれば消え失せ、次の世代は、創造することをはじめに違いない。仮に、どれ程劣悪な遺伝子だけが残ったとしても、人類は、時さえ得れば、再び繁栄を築くことができるはずだ。だが、その時迄人類は存在し続けるか。時が待つてくれているのを知らずに、自滅の道を早急に選んでしまうかもしれない。そんな事態を憂慮して、私は、人々に希望

い。

床が下降し始めた。床が円筒の中を下降して行く。ドームは上に小さくなり、青く変つていった。光源はこの床にあるらしい。私の回りはあい変わらず赤い空間だ。床面積が大きいので、それ程危険は無いが、下降速度が次第に高まり、恐しい程の高速で壁が上に伸びて行く。背に回して身に付けていた銃をおろして、その銃床を壁に触れさせると、火花が散つて、私は両手にしっかりと持った銃と共に中央へ撥ね飛ばされた。復た腰が痛い。こんなことするんじゃないか、馬鹿馬鹿しい。

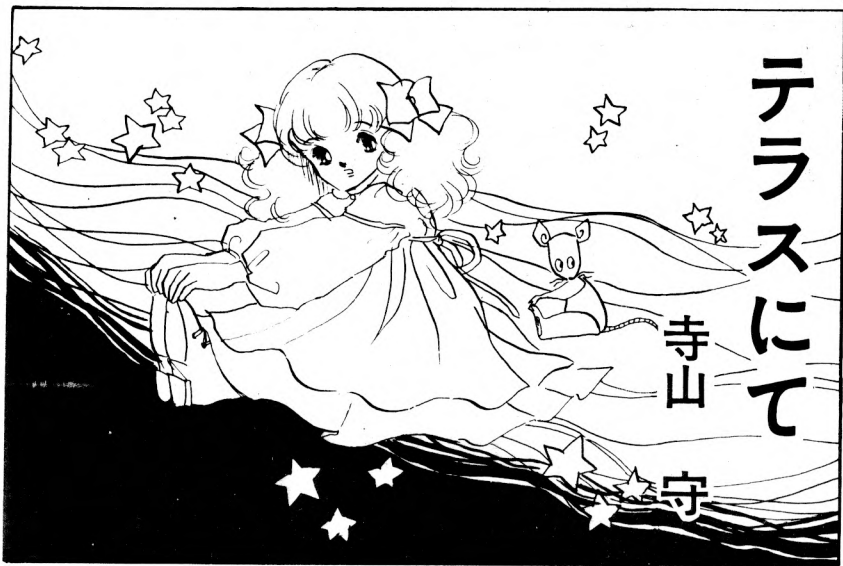
床は徐々に速度を落して、止つた。上を見上げて、青い点すら見えない。座り込んでいた私は、立ち上がろうとして、突然起きた震動の為に復た座り込んだ。床は再びゆっくりと下降し、床から白っぽい空間が私の回りに広がつて来た。何処かへ出たようだ。

赤い床は、その白っぽい場所に止つたまま動く気配が無かった。ここがどうも目的地らしい。私がやつと立ち上がつて白い床へ降りると、私を運んだ赤い円形の床は上へ戻つて行つた。ここは何なのだろう。人の造つたものには違いないが、もしかしたら、例の救助施設かもしれない。辺りを見回すと、壁も床も白い大広間だった。円形で、他へは何処へ

を与え続ける為に、ここに、OPTIMISMOを建造した。これを読み終えた者の内には、希望が芽生え始めていることだろう。行動の原動力が生まれているはずだ。それを生み出すことがOPTIMISMOの機能だからである。

ISAACKENNEDY

私は、それを読み終えた瞬間、その石板に刻まれていたように、身体の内側で何か動き出すのを感じた。ここは確かに、崩壊寸前の人類を助け出す救助センターなのだ。それも物質的にはなく、精神的に。今の人類に必要なものだ。特に私に。頭の中で理想の文明を描き悩みながら、実際の行動は何もとれなかった私に。苦痛を冷笑によつてごまかして来た私に。今、私が頭の中に育てて来た世界が、何か現実的なもののように感じている。世界に生命の息吹きを取り戻すのだ。鯨を海に。羊を野に。植物性プランクトンを湖水に。その為には、今、独自に存在し、各養殖場を占めている多くのグループを統合しなければならぬ。その第一歩として、私のいる集団を、私が動かせるようにしなければならぬ。そうだ。そうしなければならぬのだ。あの髭面を



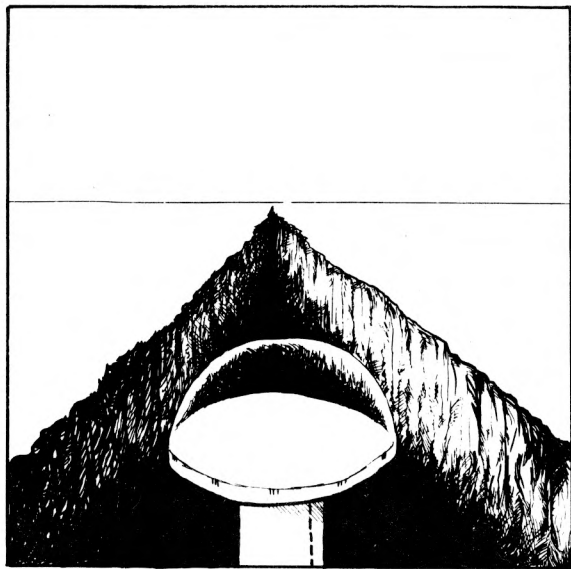
テラスにて

寺山 守

を倒す。なに、私の銃の腕なら。以前、射撃大会で二度も優勝したじゃないか。相手が人間であつてもあんな動作の鈍い奴なら競技用の標的も同じだ。私は銃を肩から外して点検した。こいつで十分だ。振り返ると、あの赤い床が降りていた。始何も無いと思つていた広い空間には、目には見えないが、エネルギーが満ちていたのだ。今は、それが分る。私は、円形の赤い床まで走つていつて飛び乗つた。多分地上まで運んで呉れるだろう。赤い床は上昇を始めた。思つた通りだ。私は心が浮き浮きして来た。夢にまで見、白昼までも私を悩まし続けた人類の現状を私が、この私が改革するのだ。素晴らしい世界をこれから築くのだ。永遠に美しい世界。

上昇する床の中央に立つて上を向いていると青い点が見え、それが次第に面積を持つて、大きくなつて来た。上のドームはもう無かつた。地上に出ると新鮮な空気が、私の帰りを待つていたかの様に、肺の中へ流れ込んだ。私は、地下深くから伸びる塔の上立つ勇者なのだ。一つ問題があつた。この塔と他の場所とを結ぶ道は、先程崩れて無くなつてしまつたのだ。この塔は深いクレパスの中央に聳えている。どうやつて向こうの地面へ渡つてやろう。距離は、どうやら、六、七メートル。助走をつければ跳び越せないこともないだろう。私は速断すると、一

番幅の狭くなつてゐる処を選び、塔の頂上で、できる限りの助走距離をとつて、クレパスの向こうの地面目掛けて、全力で走り、跳んだ。私の身体はクレパスの上を通過し、対面する地面に着地した。跳んだ。跳んだぞ。その時、私の立つてゐる地面が突然大きく崩れた。逃げることもできなかった。崩れた面積が大き過ぎる。少々肥つたかな。私は、クレパスの底へ瓦礫と共に落ちて行きながら、そう思つた。



＊ さあ行こう、永劫の道を、
四次元不連続帯を通つて。

＊ 僕はあなたの腕をとり、 α 1ヘリックスの有効水準を口ずさみながら対数計算をする。

「ねえ、対数じゃあないよ。ここをまとめるだけだよ。」

彼女は言う。

「精度が二十分の一だからわかんないんだよ。」

「ワン。」

「おいおいよせよ。」

「さあきようは、チャンピオンとマーガレットを買つてこよう。」

＊ 魚座 α 星は、ミュー・二一七四星をのぞいた。

CH_3COOH がガニメデを飛び越し、キキンデラ・トランスバイカリカは西風とともに CO_2 を吹き上げる。

宇宙は九十九・九パーセントのヘリウムで美しく輝きを増し、うつつりしている僕らにクリプトン七十五をふりかけた。

「漢字がわかんないよう。」
「なんて星だい。」

「ワン、ワン。」
「そうじゃないと思うよ。その洋煙草モクいくらだ。」
「作品考えているんだ。」
「忘れたよ、今のでプロットが。」
「ありゃあ、トリボネーマがついてるぞ。」
「ワン、ワン、ウーッワン！」

音もなく僕たちの上を外宇宙航行用宇宙船が通り過ぎて行く。

広大有辺な、所々に異次元帯インバンストリーが顔をのぞかせるこのブリストミルメックス空間において、僕と彼女はお互いにじつと見つめ合い、そして時々ニッコリと微笑み合った。すると五十億光年ほど先にあるクワエーサーは、さらにβ波を増大させ、かわりにギガンテイラーは波動エネルギーを∞に収束させた。

すべては僕たちを祝福していた。窓の中では三人のSF人間がまだなにやらしゃべっている。それが時々僕らの会話の中に混ってきたが、僕たちはそれをまったく無視した。

ふと僕ははるか九十億光年彼方のハイドロジェン二十一センチ波を見上げた。

「美しい夜だね。花子や。」

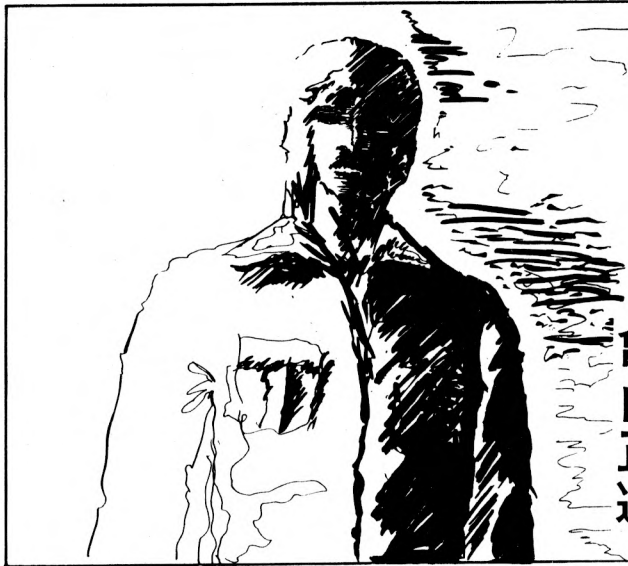
すると彼女はうれしそうに答えた。

「ワン！」



小正月

龜山正道



殺す。人工皮製の黒い手袋をはめると、おれは、影のように躍り出た。突然の天災に驚く男に、奇跡の速度で、中拳五段づきをたたきこみ、矢のように鋼鉄の抜き手を眉間につき刺す。倒れかかるところへ、こめかみへの旋風脚でとどめを刺し、顔面半分を肉塊に変えた。

人の気配に、反射的にふりかえって見ると、一組のアベックが茫然と立ちつくし、腰が抜けたような恰好で、おれを凝視していた。おそらく見られたのだらう。このまま帰してやるわけにはいかなかった。おれは、拳についた血糊を服でぬぐうと、ゆっくりと、二人に近づいていった。二人は、おれの意図を察したのか、あわてて、おれから逃げようとした。しかし、無尽蔵の力を駆るおれから逃げ切ることとは不可能に近い。おれは、軽々と男に追いつき、スライディングの要領で、男の足の間にすべりこむと、股間に弾丸のような右アッパーカットをぶちこんだ。圧倒的な破壊エネルギーを受けた右拳が、男の下腹部をあっさりつき破り、骨盤をも粉碎し、内臓にまで達した。おれは、男の下腹部から腸のからみついた右腕を引き抜くと静かに立ち上がり、女の方へ向き直った。女は、すでに、逃げようとする気力も失い、ただ壁よりかかっていた。おれは、女の正面に立つと、左右の指を力まかせに眼球につき刺し、

リングを割るかのようにあっさりと、女の顔を左右に引き砕いた。俺のような血液とともに、大脳がころり落ちて、おれの足元で潰れる。おれは、ドロドロになった眼球のねじりついた指を、女の顔から引き抜くと、いきなり、跳躍して、民家の屋根つたいに闇に消えた。

朝からの憂いの雨の中、おれは、全身をフラットブラックでかため、シューティング・グラスで目を覆って機会を待った。あたりに鋭く注意を配りながら、中国製の高級軍手をはめる。

来た。

雪駄独特の半濁音を響かせて暴力団員風の男が現われたとたん、いきなり、おれの闘争本能に火がついた。全身に無敵の力が漲る。おれは、無言のまま、消火栓を踏み台にして宙に躍り出ると空中で半転し、鋼鉄の手刀を超音速でたたきおろす。究極の衝撃を受けて、男の頭蓋骨は霧となって飛び散り、反動エネルギーを伝達された眼球が弾丸のように飛び出してブロック塀を破壊した。通行人が見たら腰が抜ける程驚くに達しない。首なしの死体が、ころがっている道路なぞ、そうやたらとはないものだ。

おれが、何気なく五萬を切ると、対面の男が薄ら笑いを浮かべて手牌を倒した。それは、断公平和国士無双という信じられないような手だった。これで

おれの、今日の負け分は、三百万を越えたことになる。おれは無言のまま、先程火を消した、吸いかけのランバージャックに再び火をつけて、大きく一服すると、目にも止まらぬ速さで牌をつかみ、対面の男に投げつけた。男の顔の中心に牌が命中すると、大口徑マグナム弾の直撃にあつたかのように顔面がふっとび、後方の壁に血糊となってへばりついた。おれは、すぐさま立ち上がる、右脇の男の首を、握りさま強大な握力によって潰した。そして、軽く跳躍すると、左脇の男の真後ろに着地した。背面からの双方抜き手で心臓を突き破り、外側に向かつて両腕に力を入れると、肉の碎ける音を立てて、男の体に、五十センチ程の亀裂が生じた。おれは、静かに男の脊髄から手を引き抜き、短くなったランバージャックを口にくわえたまま部屋を出た。

おれは機会を待っていた。上方から、微妙な振動を受けたとたん、体内の無限のエネルギーが、うなりを上げた。おれは、湖面から波動を立てて、強烈なスピン状態で躍り出た。が、すでに老婆は、驚きのあまり、心臓マヒで絶命していた。おもしろくもなんともないこと、この上ない。

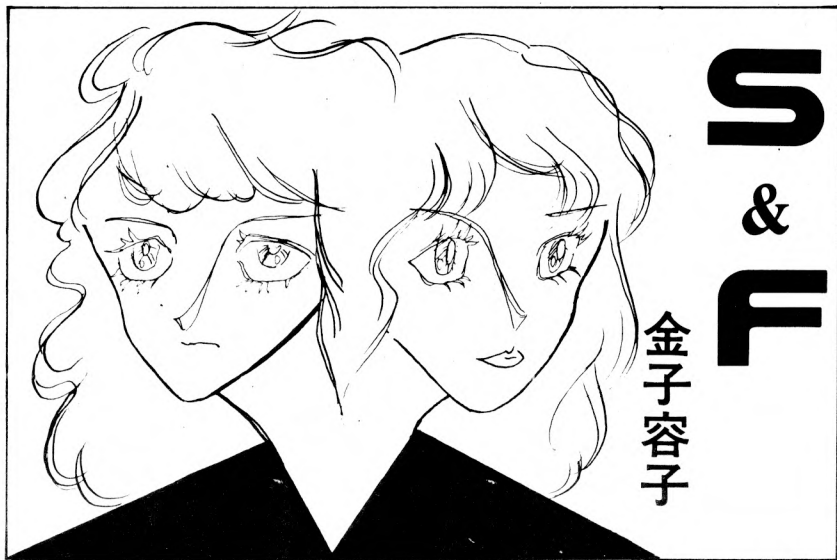
公園の芝の上で横になっていると、唐突に脇腹に冷たい感触が生じた。多分、銃口だったのだろう。いわれるまま、おとなしくしていると、知らぬ間に、

なまぐさい地下室につれこまれていた。おれの正面では、ゴリラのような筋肉で武装した男達が、大口徑マグナム拳銃をしかと構え、確実におれの心臓部に照準を合わせていた。先日、おれが手にかけて暴力団員の報復のつもりだったが、相手が悪すぎたようだ。おれの凶暴さは、言語を絶する。暴力という言葉は、おれのためにある。おれは、ゆっくりと手を降ろすと、静かに一步を踏み出した。先頭の男の脇が、ピクリと動いた瞬間、三人とも、なんのためらいもなく、殆ど同時に引き金をふりしぼった。

とてつもない轟音を発して、マグナム弾が正確におれの心臓部に集中した。だが、想像を遙かに超える強大な筋力を誇るおれにとっては、子供だましの攻撃にすぎない。何ごともなかったかのように平然と立っているおれを見て殺しのプロフェッショナル達は、不信の表情を浮かべた。おれが、いつもの薄ら笑いを浮かべ、さらに一步踏み出すと、男達は、やみくもに連射してきた。弾丸は、すべて急所に集中してきたが、おれにとっては、飛びまわるうるさい蠅みたいなものだ。おれは、大きく宙に飛ぶと、先頭の男の首を握り潰し、そのまま引っこぬき、電光石火の勢いで、後方の二人に投げつけた。男の首がミサイルの速度で二人に襲いかかり、体のはぼ中心部に大きな空洞を作りながら、矢のように突き抜け

た。これからは、これを、マグナム効果と呼ぼう。おれは、いきなり、地中から火山弾の勢いで躍り出ると、道行く幼稚園児に襲いかかった。目にも止まらぬ早技で半ズボンを引き降ろし、右足のつけ根を掴むと、ひねりを加えながら全力で大速投を試みた。上着の幼稚園児は、流星の勢いで空を飛び、風呂屋の煙突につき当たって、短い生涯を閉じた。

どことなく寂しい空地で壁にもたれて、ランバージャックをふかしている、皮靴の音と共に、新聞記者風の長身の外人が向かって来た。おれは、黙ってタバコの火をもみ消す。今のおれは、超絶好調で体中に燃えあがるような闘争本能がうずまいていた。おれは、突然、黒縁眼鏡をかけた外人の前に立ちはだかると、矢のように前方に飛んで、男の腹部に強烈なボディブローを見舞った。だが、内臓をそのへんにぶちまけた惨殺死体を予想していたおれは、愕然とした。そいつは表情一つ変えず平然と立っていたのだ。人間ではありえなかった。おれは、相手が生来最強の敵であることを悟った。男がおれに近づこうとした刹那、おれは、再び強力なスプリングのように宙に跳躍すると、おれのとっておきの切り札をくり出した。それは、核ミサイルにも匹敵するほどの破壊力を誇る、光速に近い速度を持った、全身全霊をこめた左旋風脚だった。だが、熱エネルギー



金子容子

「待って、ねえ待ってよF。」
 どこまでも続く草原、見渡す限りの緑。
 「早く、早くしたらS。」
 興奮したFの声が遙かむこうで聞こえた。SはFを追って走る。
 「F、F……。」
 Sは足が草にからまって、いきおいよくたおれた。
 —ガタン—
 「停止信号のため、少々お待ち下さい。」
 Sは頭をたれたまま、うす目を開けた。
 「夢か。」
 それは時々見る夢であった。電車はまだ動きだした。Sはガラスに映る自分の顔を見つめた。青白くうかびあがった彼の顔は、まるで死神であった。が、眼だけが異様に光っていた。
 Sは重い足どりで自分の家に着くと、そのまま、ごろんと横になった。Sの家というのは狭いアパートの一角である。Sはあお向けになると、なんだか天井が低くなったようだと感じた。そして次の瞬間には、Sは草の上につぶせにたおれていた。しばらくSはそのままの状態で、草の肌に触れる感触を楽しんでいた。もうFの声は聞こえなかった。
 このままずっとこうしていたい。
 Sはいっしょか夢の世界をさまよっていた。



1を発して砕け散ったのは男の頭ではなく、おれの鋼鉄の左足だった。おれは、バランスを失って地面に落下した。おれの負けだった。だが何の悔いもなかった。おれは爽快感の中で氣を失った。

ある少年のお話

あるところに、一人の少年がすんでおりました。そこは、とても過ごしやすいところでした。たべものはたくさんあり、そばには、いつもきれいな水をたたえている小さな泉もありました。少年は、そこでおだやかにくらしていました。ところが、ある日、少年はかんがえました。
 (地平線のむこうには何があるんだらう)
 そこで少年は、おひさまがのぼる方にむかって歩きはじめました。四日ほどいくと、とても大きな崖につきあたりました。少年は、それ以上すすめないことがわかると、あるところへすすむことかえりました。そして、少年は、そこで一生を平和にくらししましたとき。

松本裕之

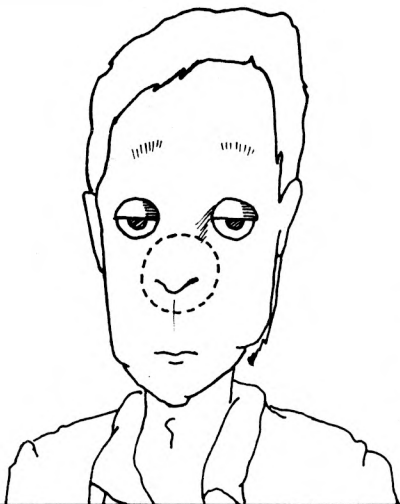
— Sはどうしたんだろう。—
 Sのことを気になげながらも、Fはあい変わらず走り続けた。息が切れると、わりあい背の高い草をちぎっては、それをふり回しながら歩いた。Fには別に目的があるわけではなかった。ただ、どこまでも駆けていたかったのだ。草原は、Fの欲求を満たすべく、ただただどこまでも続いていた。
 — このままずっと駆けていたい。—
 Sはふと夢からさめた。薄暗い電気の下で部屋を見回すと、Sにはなんだか壁が押しよせてくるような気がした。
 「それにしても……。寝入りばなの現実と夢との境目というのは、知覚できないものかな。起きる時は、はっとして眼がさめるのにな。」
 Sはそう考え、着ていた上着を脱ごうとして立った。部屋が狭くなつたな。
 実は昨夜もそのことは感じられたのだ。いや昨夜だけでなく、その前の夜も、またその前の夜も……。ま四角な天井が、ま四角な壁が、自分を押しつぶしてしまいうようなのだ。
 Sは深いため息をついた。そしてあの夢の続きを見ようと思った。眼をつむると空白の世界、暗いのか明いのかもわからない。
 「S、S……。」



ああ、だれかが呼んでいる。Fの声だろうか。では私はこれから夢の世界へ……。
 もう一度FはSを呼んでみたけれど、返事はなかった。Fは走りながら、上着のポケットに手を入れると何か手が触れた。
 「何だろう。」
 それは小さなサイコロのようなものであった。Fは何とはなしに、それをていねいに土の中に埋めた。
 Fは走り続けた。そして気がつくともFの足は地面を離れ、空を飛んでいた。もう決してもどることはできなかった。

切り取り線

大沼弘幸



「痛！」
 指先に鋭い痛みが走り、それまで単調な快い響きを立っていた包丁の動きが、そこで止まってしまった。見ると、今までキャベツをおさえていた左手の人差指の第一関節から指先へかけての側面が、ザックリと切り裂かれ、鮮血が不揃いな千切りの上にしたたっていた。
 「ちくしょう。これも並木のせいだ。」
 俺は、自分の料理の腕を呪うかわりに、並木のことを罵りながら、指先をくわえて救急箱を取りに行つた。
 近頃の俺は、とみに不機嫌になり、しかも何か嫌なことがある度毎に、それを並木の責任であるかの如く言い散らしていた。
 今日の俺もご多分にもれず、並木の悪口を言いながら、傷の手当てをしていたのである。
 出血をティッシュでおさえながら止め、バンド・エイドを張ろうとして、ふと何かが気になった。
 その時はそのままになっていたのだが、料理をするのも嫌になってヤケクソで煙草を二、三本たて続けに喫っている時に、やっと思ひ出した。
 数日前、やはり同じ様に煙草を喫っている時に、その煙草をはさんでいる左の人差指に、赤い筋が走っているのを見たのだった。

それは傷でもなく、万年筆やボールペンで書かれた様なインクの跡でもなく、確かにくっきりと指先に浮き出ているのだが、そんなものをつけた覚えは何処にもなかった。

だが、バンド・エイドを貼られた指先を見つめながら、おれには或る確信があった。その赤い線は、今日俺が、誤って包丁で切ってしまったこの指先の傷と、全く同じ位置、同じ角度の所にあつたのだ。

次の日の夕刻、俺は公園のベンチに坐つて、ここへ来てから十何本目の煙草に火をつけていた。

夕闇がせまり、木々は暗い影を落とし始めていた。俺はその薄闇の中に一人ポツンと坐り、うまくもない煙草を喫い続けていた。

洋子が約束の時間にこんなに遅れることはなかったんだが……。

俺はイライラし、喫いかけの煙草をもみ消し、次の煙草を出そうとしてポケットに手を突っこんだ。その時、公園の小径を歩いて来る女の姿が目にとまった。

洋子だ！

俺はそれまでの不機嫌な表情は何処へやら、にこやかに微笑みながら立ち上つた。だが、その微笑みはすぐさま凍りついてしまった。

子と結婚してもいいと思つていた程だった。

だから、街で会社の同僚である並木に会つた時にも、俺は躊躇なく洋子を紹介する気になつた。自分の友人に、将来自分の嫁さんになるかもしれない恋人を紹介するために、何の抵抗もなかった。

だが、並木の反応は俺の予想していたものではなかった。

並木は、初めはごく普通に、自分と俺との関係などを話していたが、そのうちにマジマジと洋子の顔を見つめ、しばらく宙を見つめる様に考え込んで、そして叫んだ。

「きみ、洋子ちゃんじゃない？」

洋子は、初めはやはり訳が判らないというふうになんて見つけていたが、やがて同じように声を上げた。

「並木くん！」

二人は小学校の同級生だったのである。

この時俺が抱いた感情は、誰しも同じであつたらう。自分の知らない彼女の過去を、自分にはもう入り込む余地のない彼女の過ぎ去つた日々を、共有している人間が現われたのだ。彼女を恋人として、この世における唯一無二の異性として意識した時、この人間は許さざるべき存在だった。恋人同志という二人で築き上げた、二人だけの世界を、過去の思い

彼女の後ろには、あいつ、並木と一緒に歩いて来るのだった。

「ごめんなさい。遅くなっちゃつて。並木さんと一寸用事があつたものだから。」

彼女がすまなさそうに言つた。その一言だけだつたら、俺も許す気になつていたかもしれないが、そこへ並木がたたみかけてきた。

「いや、すまん、田村。今度俺達でクラス会を開こうというんで、洋子さんに相談に乗ってもらつたんだ。洋子さん、おまえとデートだと言つてたんだが、俺が無理矢理引き止めてな。だから、おわびしようと思つて、一緒について来たつて訳だ。」

並木はわびてるつもりはしつたが、俺には奴がすまながつている様子など、毛ほども見えなかつた。俺は黙つたまま、二人を見比べているだけだった。

並木と俺、実は会社の同僚である。入社も同期で、所屬の課も一緒だったから、入社以来、一番の親友であつた。

その並木を、俺がこんなにも憎むようになったのは、半年程前、俺が洋子とデートしている最中に、並木と偶然会つた時からである。

洋子と俺は、ある友人のクリスマスパーティーで知り合い、それからつき合いを始めるようになった。二人の関係はうまくいつており、このまま進めば洋

出という強力な武器で破壊しつくす忌むべき侵入者だつた。

俺は、並木と洋子が、かつての幼なかりし日々の思い出話にうち興じているのを、苛立たしい思いで眺めていた。

だが、もちろん、これだけでは俺が並木を憎む理由にはならない。そんな思いなら、誰でもいい、自分の妻なり、自分の夫なりの子供の頃のアルバムを見ながら、何故ここに自分が写っていないのだからかと、いぶかしげに思うのと大差はない。

問題は、並木と洋子が、俺の知らない間に、幾度か会つているらしいという事だつた。

もちろん初めは、昔話をするためだつたに違いない。俺だつて、かつての級友に会えば、懐かしくて話をしに出掛けて行つた筈である。だが、それにしては会う回数が頻繁すぎた。洋子は何も言わなかつたが、並木がことさらにそれをほめかそうとする。

それがよけい俺を苛立たせた。かつて、幼心に好意を抱きあつていた二人が、成長した後にある日偶然出会つて、再び恋心を燃え上

がらせたのだとしたら……。

並木には、彼女の過去という強い武器があるだけに、俺には勝てそうもなかつた。

俺が最近、途中飯も食わずに真直ぐ家へ帰るのも

実はこのためなのである。

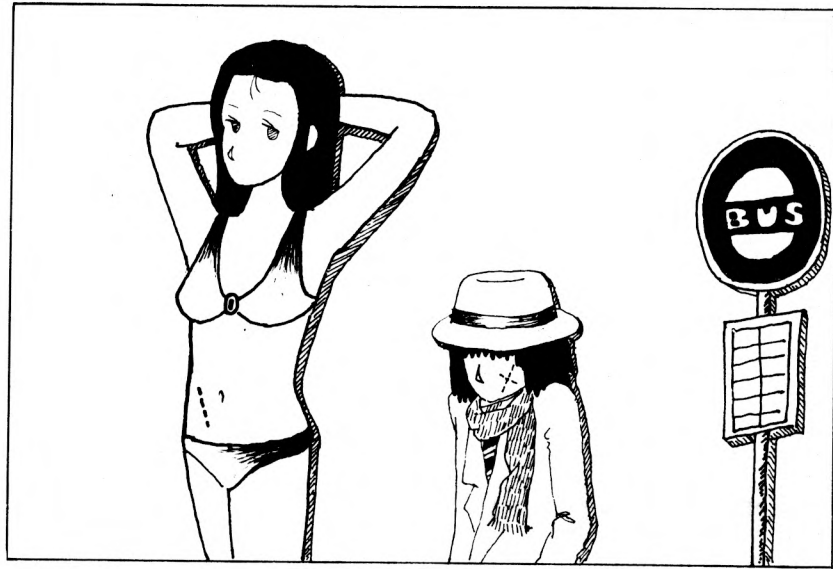
並木と俺は、会社も同期だが、住んでいる所も近かった。通勤には同じ電車の駅を使っていた。従って、必然的に奴と一緒に帰る事が多くなる。一緒に夕飯を食って駅で別れるのが、今までの通例だった。だが俺は、並木と洋子の仲を怪しいと感じ始めてから、少しでも多く並木と離れていたかった。会社ではともかく、今の俺には、奴と一緒に飯を食う気など毛頭なかった。

俺は適当な口実を見つけて、外食をやめ自炊することにした。こうすれば、一緒に飯を食う必要もないし、帰る時間がずれるから電車で会う事もなかった。

並木は俺が自炊を始めた事に対して何も言わなかった。ひょっとしたら、何もかも全て知っていて、奴の前から逃げるように姿を消す俺を見て、勝利感めいたものを感じていたのかもしれない。

その結果が、不慣れた自炊の末の、あの指の怪我だから、俺があの時並木を罵ったのも、さほど故なきことではない。

そして、今日のデート。実のところ、俺は今日のデートにある種の期待感を持っていた。もし、今日のデートでも、洋子が充分な好意を俺に示してくれるのならば、まだ望みはあると思った。洋子と並木



の仲を、俺が勝手に勘繰って、一人合点していたのかもしれない、という思いがあったからだ。

だが、その期待は完全に裏切られた。洋子は遅れて来たばかりか、それは並木の為だったのである。

並木の出現は、一見俺に合わせるためであるかのように見えるが、その実、並木がいかに洋子を練るか、並木の意志によって洋子と俺とのデートぐらいつっぱかせるのは簡単なのだぞ、という事を誇示するためだったのであるまいか。

並木は遂に俺に、表だって挑戦してきたのである。並木は、わび言めいた事を二、三言っただけで帰ってしまったが、とり残された俺と洋子とのデートが、それからうまくいこう筈もなかった。

俺はムシャクシャした気持ちで自分の部屋へ帰り着いた。デートは不快なだけだった。いつもの半分にもならぬ時間のうちに、どちらから言うともなく別れてしまっていた。

今の俺にはもう、洋子が俺とデートするのも、ただ単に俺との別れ話を持ち出せないでいるためだけのよう思えていた。

上着を脱ぎ棄て、ネクタイをひきむしるようにはずしながら、ふと鏡を覗き込んだ。

そこには、苛々して不機嫌な、くそ面白くない

俺の顔が写っている筈だった。俺はその顔に向って莫迦野郎！と大声でどなりつけてやるつもりだった。そうでもしなければ、到底腹の虫がおさまる筈もなかった。

だが、鏡に写った自分の顔を見て、俺は自分の意図とは逆に、はっと息をのんでしまった。

確かに、そこに写っているのは、俺自身の、不機嫌な苛立った顔だった。しかし、俺を驚かせたのは、その顔中に這い回っている。不気味な赤い線だった。その、傷でもなく、インクの跡でもない、正体不明の赤い筋は、俺の顔をくまなく、額から耳へ、頬から顎へ、鼻から口へ、ほとんど全面を埋めつくすように走っていたのだ。

俺は呆けたように、しばらくの間そうやって鏡を見続けていた。そして次の瞬間には、狂気の如く、ほとんど破らんばかりにして、シャツを剥いだ。

出来得ることならば予想が的中しないことを期待していた俺は、しかし、そこにくっきりと、赤い筋が全身を這い回っているのを見つけてしまった。

俺は痺れたようになつた頭脳の中で、しかしこれだけははつきりと悟っていた。

これは運命の切り取り線なのだ。俺はいつか、この切り取り線の如く、全身ズタズタになって死なねばならぬのだ。

俺は、自分の、死の運命を見てしまっていたのだ。
った。

人、人、人の流れの中に呑み込まれ、押し流されながらも、俺はただ一人、この流れに協調できぬ異端者だった。

朝の通勤ラッシュ時の雑踏。ホームを埋めつくすおびたらしい人の数。しかし、この数限りない人間の中の、誰一人として、俺の顔の赤い筋に気付いてくれる者は居なかった。

自らの体にあの赤い線を見出した日以来、俺は魂の脱け殻の如く、仕事にも、日常の生活にも身が入らなかった。

俺は死の予感と、それを誰も気付いてくれないという孤独感の中で、うちひしがれ、俯抜けたようになっていた。

洋子にすら、ここしばらくは会う気になれなかった。

俺の前に居た連中が、今着いたばかりの電車に詰め込まれ、俺の前から消え去って行った。

あの連中に明日はあるのだろうか。毎日、こんなギューギュー詰めの電車に揺られて、あの連中は自分の運命には気付きもしないのだろうか。明日自分が死ぬ運命だったとしても、それを知っている者が

「田村、大丈夫か」

並木は俺に近寄ってきて、手をさしだした。俺はそんな手には気付かぬふうに、柱に寄りかかりながら立ち上った。

「駅に入ったらお前の姿を見つけたんで、声をかけようと思って後まで行っただが、その途端に押されてな。俺もよろめいてお前にぶつかっただが、ほんと、あぶない事をする奴がいるもんだよ。電車に乗ろうと思ってあせってたんだろな。」

だが、俺はもう、並木の言葉など一切耳に入らなかった。頭の中に、ドロドロと熱く激しいものが渦巻き、目だけが異様な輝きをこめて、並木を見すえていた。

——こいつが俺を殺そうとしている。何故、今まで気が付かなかったのだろう。洋子との関係が進めば、当然いつかは俺が邪魔になる。その時、俺に殺意を抱いたとしても、何の不思議もない。俺は並木に殺されるのだ。俺の切り取り線は、この男によつて記されていたのだ。

俺の体に何の異常もないのを知ると、乗客はゾロゾロと電車に乗り込み始めた。駅員も立ち去り、駅のホームは、またいつもの平穩無事な喧噪の中に、たち返っていた。

ただ、並木と、奴を血走った目で見つめる俺とを

知らない者と、どちらが幸せなのだろうか。

そんな事を考えている内に、次の電車がホームに入ってきた。気が付くと、俺は列の一番前、ホームの端っこに居るのだった。

電車が俺の前を行き過ぎようとした瞬間、突然俺の背中を突き飛ばした奴がいた。あっと思った時には、足もとがよろめき、体が前につんのめっていた。一瞬、死の予感が頭の中をよぎったが、反射的に出した左腕が、ホームの柱をつかんでいた。頭のすぐ側を通り抜けて行った電車が、俺に烈風を吹きつけていた。

気が付いた時、俺は左腕で柱を抱きかかえる形で、ホームにころがっていた。あまり見られた姿ではなかったが、自分の命にはかえられなかった。

電車が止まり、駅員が駆け寄ってきて、ホームの人垣が何事かという様に、俺を注視していた。

「いったい誰が俺を突き飛ばしやが……」

俺は興奮し、あやうく俺を殺しかけた人間の姿を捜すべく、俺の立っていたあたりへ目を向けながらそうどなったが、そこに立っている男の姿を認めると、言葉を失ってしまった。

「並木。」

そう、俺を突き飛ばし、俺を殺そうとした男は、まぎれもなくあの並木だったのである。

取り残して。

「お前、最近洋子ちゃんに会ってないんだって。」

駅での出来事から数日たった或る日のことだった。今日もまた、無気力で呆けたような一日が過ぎ去っていた。あの日以来、俺の精神崩壊はますます激しくなってきた。死への予感におびえると共に、並木に対する熱い激情が、脳味噌の底を焼きつくしていた。

俺は極力並木を避け、奴に会っても口もきかなかった。それでも尚、会社へ行き続けていたのは、一人で家に居れば、たちまち発狂するだろうことは目に見えていたからである。

並木は多少、俺の異常を気にかけて始めていたようである。俺と顔を合わせると、何くれとなく言葉をかけてくる。だが、俺の異常の原因が、何ものでもない、自分自身なのだという事を、奴が知る筈もなかった。

その日も並木を避け、早々と電車に乗ったつもりだったが、ふと見ると、奴が隣の車両に乗っていた。並木は、俺を見つけても、別に驚ろいた様子もなく俺の車両へと移ってきた。ひょっとしたら、俺を追いかけて来たのかもしれない。

「洋子ちゃん、お前のこと心配してたよ。」

何のわだかまりもなく並木の口から出る、洋子という言葉を、俺は鋭い刃物で内臓をえぐられるような思いで聞いていた。

しかし、並木は、俺のそんな思いには全くお構いなしに続けた。

「彼女、近いうちに、お前を彼女のアパートへ連れて来てくれって言うんだ。いくら電話をかけても最近のお前は生返事ばかりだって。」

「最近、洋子と会ったのか。」

「ううん、まあな。」

俺は電車の揺れに身をゆだね、並木の顔を見つめながら尋ねた。

「お前、洋子と小学校の同級生だったって言うけど、特に親しかったのか。」

「別に特に親しいって……。ただ、家は近かったし教室でも並んで坐ることが多かったけどな。」

「洋子が好きだったのか。」

「よせよ、小学生だぜ。ただ遊び友達としては気に入ってたけどな。」

俺の熱っぽい目に気圧されてか、並木は口ごもってしまった。しかし俺は、並木のそんな感情には少しも構わずに、ぐいぐいと切り込んでいった。

「今はどう思ってる。」

「どうって……。」

「洋子が好きかってことだ。」

「そんな、お前。洋子ちゃんはお前の恋人だろうが。」

「だからって、好きじゃないって理由にはならんぞ。」

「おい、よせよ。」

さすがに並木も、声を荒げていた。

回りに居た連中が、何事かと俺達の方を振り向いた。並木が何でもないとというような顔をあたりに向けてから、俺にささやいた。

「洋子ちゃんの家に行くだろ。」

「今日か。」

「行ってもいい。」

並木は安心したようにこっくりとうなずいたが、その時の俺はもう、別の考えに沈んでしまっていた。

洋子の家に行くには、俺の家に向かうこの電車を乗り越して、俺の使っている駅の数駅先から、乗り継ぎしなければならぬ。

その駅で乗り継ぎの電車を待ちながら、俺はもの思いにふけていた。

まだ退社間際だから、ホームは人でいっぱいである。人ごみに押されながら、俺達はホームの端っこに立ちつくしていた。

駅、人の波、電車。洋子、並木、俺。あの時、並木は本当に俺を殺そうとしていたのだろうか。判らない。だが、今、俺の体を這い回っている赤い筋は本物だ。あの筋は日毎に、くつきりと明瞭になってきている。俺の死期が近づいている証拠なのだ。あんなズタズタに、あの通り切り取られたら、どれがどの部分だったのか区別もつかんような死に方など轢死以外にあるだろうか。俺は確かに、いつか、列車にひかれてズタズタになって死に果てるのだ。それが、並木が手を下したためによるものでないと言

い得る保証は何処にもない。並木が洋子を愛しているというのには本当だろう。特に俺がこんなざまでは。こんなざま、か。こんなヨレヨレズタポロの男を愛せる女など居る筈がない。その上、並木のような男が優しく言葉をかけてくれれば。だが、待てよ。俺がこんなズタポロになったのは誰のためだ。並木のせいじゃないか。奴が俺に殺意さえ抱いていなければ、奴が俺にこんな醜い切り取り線を刻まなければ、俺はいつものように洋子を愛し、それに並木がいなければ、並木がいなければ……。

駅へ入って来る電車のライトが見え始めていた。ホームに立つ人々が、電車に乗るべくザワザワと移動を始めている。

俺は並木の後にそっと近寄った。電車がホームの

端にかかっている。俺の両腕がそろそろと持ち上がった。並木の背中ですっと止まる。手の甲から腕にかけて、赤い線が幾筋にもかけて走っているのが、いやにはつきり見えた。電車が近寄ってきていた。並木は電車の方に注意を寄せて、俺の方を振り向きもしない。両腕だけがまるで別の生き物のように無感覚になり、俺の意識から離れていった。

電車が俺達の前を通り過ぎようとした瞬間、俺の腕は並木の背中を思いきり突き飛ばしていた。

並木の体は一瞬、宙に舞い、そしてたちまち、電車の車輪の中へと引き込まれ見えなくなっていた。

臓腑をえぐるような鋭い悲鳴が、夕闇の中に響き渡ったように思えたが、俺はその時既に、駅の雑踏の中に、姿をくらましていた。

いったいどのくらい歩いていたらうか。時間の感覚が、いや外界に対する全ての感覚が、麻痺してしまっていた。

並木を殺した。俺が、この俺が、自分の手で並木を殺したのだ。奴は、今、人間である事をやめてしまったばかりでなく、その形すらとどめてはいないのだ。ズタズタに、ポロポロに、奴は今、重くのしかかった電車の車輪の下で、男とも女とも見分けのつかぬ、数限りない肉塊になってしまったのだ。

俺は勝った。並木に勝った。俺に襲い来るであろう運命を、俺は並木に押し返してやったのだ。

俺は生きている。まだ生きている。だが、並木は死んだのだ。

俺は、並木に、そして自分の運命にすら勝ったのだ。

同じ思考が、とりとめもなく、何度も何度も、エンドレス・テープの如く、頭の中を行き過ぎて行った。

俺はそうやって自己陶醉しながら、すでにとっぷりと暮れなずんだ街中を、本物の泥酔者の如く、フラフラと歩き続けた。

これでやっと体中の赤い筋も……。

俺はふと気が付いて、街角のショーウィンドウを覗き込んだ。

酔ったようになっていた頭に、ズキンと冷たいものが走った。体が小刻みに震え、血の気の引いていくのが判った。

ショーウィンドウに写った俺の顔には、まぎれもないあの赤い筋がくっきりと浮かび上っていた。

驚いて触れようとしたその腕にも、赤い線は残っていた。しかし、その手の甲を縦横無尽に走る線は、前よりも鮮明さを増していた。

俺を殺すのは、並木ではなかったのか。

驚愕に目を見開いた俺の顔を、ガラスに写った俺の顔が、同じ表情をして見つめていた。

俺を殺すのは誰なんだ！

ガラスに写っていた俺の姿が、粉々に砕け散った。両の拳が、ガラスの破片で切れて血みどろになっていた。

俺は歩き続けた。やみくもに歩き続けた。死の予感が、死の恐怖が、そして何の関係もなかった並木を殺してしまったという罪の意識が、俺を追い続けていた。

俺は歩いた。歩き続けた。しまいには、駆け出ししていた。それでも俺は、俺をつけ狙う死神の掌から抜け出すことはできなかった。

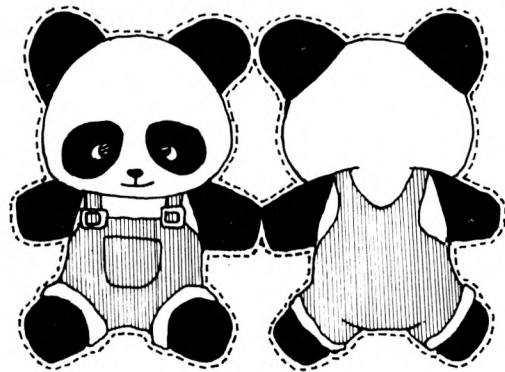
気が付くと、俺は洋子のアパートの入口に立っていた。

全身汗みずくになり、体中の力が抜けきっていた。思考は平常の半分ほども働かず、ただ憑かれたように、目だけがギラギラと光っていた。

何故俺はここへ来てしまったのだろう。

街灯に照らされ、二階の、洋子の部屋の窓の明りを眺めながら、そんな事を思った。

自分が今まで何処でどうしていたのか、何も覚え



てはいなかった。

額から流れ伝ってきた汗が目に入り、それをぬぐうために、右手を上げた時、その拳の傷に気が付いた。

そうだ、俺はあのショーウィンドウを叩き割って——、俺は、俺は、——この血みどろの両手は、並木を殺した腕なのだ。

唐突に、その事を思い出した。

鈍くなった頭の中では、並木を殺した事すら、遠い夢の中の出来事のようにだった。

そうだ、洋子に聞こう。俺を殺すのが誰なのか。俺は何故死なねばならぬのか、洋子なら教えてくれるかもしれない。

俺は、自分でも知らぬうちに、ここへ来た。俺が赤い色の運命線に繰られているのなら、ここへ来たことだって、一つの運命かもしれないのだ。

洋子に聞こう、洋子に。

俺はフラフラと、アパートの階段を上って行った。ノックの音に誘われて出て来た洋子は、最初俺を見ても、さほど驚きはしなかった。

だが、部屋の入口に、夢遊病者の如く立ちつくす俺の姿は、次第に洋子に異様な感じを与え始めたらしい。

「並木君は……？」